

提題にかえて

山本ひろ子

所員／表現学部教授

黒い翁——乾武俊さんとの出会い

本日は酷暑の中、ようこそおいでくださいました。最初に主催者の私から、簡単に本フォーラムの趣旨をご説明し、会の口火を切らせていただきます。

今年（二〇一三年）の三月、紀州和歌浦で「仮面フォーラム——芸能と仮面のむこうがわへ」というタイトルのイベントを開催しました。今日の仮面フォーラム「面と語りのドラマツルギー」は、それに続く第二弾なので、前回のフォーラムの立ち上げと経緯をお話しし、この場に繋いでいきたいと思っています。

そもそもなぜ「芸能と仮面のむこうがわへ」というテーマを設定したのか。

思い起こせばきっかけは二つありました。一つは、私がさほど芸能に関心をもっていなかった十数年前でしょうか、たしか国立劇場に民俗芸能の公演を見に行った時のこと。畏友の藤井貞和さんが幕間で、「あなたは乾武俊さんの『黒い翁』を知っている？ 黒い翁ってすごいタイトルでしょ？」と聞いけてきた。私は恥ずかしいことに、著者もタイトルも知らなかったのですが、ただこれはなにかあるな、と直感しました。なにしろ思想一辺倒の私を初めて祭り（新野の雪祭）に引っ張り出したのも彼でしたから。こうして藤井貞和のささやいた『黒い翁』という強烈なタイトルは私にインプ

ットされたわけですが、実際に読んだのは大分たつてから、また乾さんとの出会いはずっとあとのことになります。

二〇〇九年七月、私は高知県香南市赤岡の芝居小屋「弁天座」で「あかおか芸能の市」という興行を打ちました。それをチラシで知った乾さんから、私の著書を読んだとこのことで長いお手紙をいただいたのがお付き合ひのはじまりです。

さて乾さんは、阪南の旧南王子村を中心に被差別部落の伝承文化を五、六十年にわたって調査・研究されてきました。私のなかの中上健次と路地の物語が、乾さんのそうしたお仕事とクロスしたこともありすが、何よりも中世の芸能神・摩多羅神、それも近年「出現」した、安来・清水寺の摩多羅神木像（鎌倉後期作）が私と乾さんを接近遭遇させたといえそうです。（そのあたりの経緯は、『和歌浦仮面フォーラム…芸能と仮面のむこうがわへ』資料集をごらんください。）

和歌浦仮面フォーラムの開催

こうしてここ四、五年親しく乾さんとお付き合ひしてきたのですが、その一つの結実が、三月の和歌浦仮面フォーラムの開催でした。乾さんは生涯をかけて、膨大な数の仮面を蒐集されてきた。しかしながら九十二歳という齢を迎えて「仮面と訣別してゆく」の覚悟から、最後のイベントを故郷の紀州で開きたいと切望された。「それならやりましょう、お任せください」と私が呼応して開いたのが和歌浦でのフォーラムだったわけです。

初日の乾さんの講演タイトルは「若い女面と黒い嬪面」で、また乾さん創作の翁劇「カイナゾ申しに参りたり」も初披露されました。翌日のフォーラムでは、乾さん最後の大著『能面以前——その基層への往還』を前面に据えて、報告と討議が行なわれました。もちろん私どもは乾さんをどんなに尊敬していても、その研究方法や言説に対して、しつかり評言せねばなりません。それが私どもの責務でもあり、乾さんとの交流になるのです。

乾さんは「面は着けて動いてなんぼである」と仰る。しかし私たちのなかには、面と語りというテーマがせりあがってきていました。面は語らないものだとの発言に対して、いや、面は語るものとの異見の応酬で前回のフォーラムは終り、今回に持ち越されたということになります。そういう意味でこの会場にこそ姿は見せておりませんが、一番のゲストは乾さんなのです。

土俗面と白い翁・黒い翁

そんなわけで今日のフォーラムは、紀州仮面フォーラムの展開でして、その先を志向するという視点で設定されています。

一つが能面「以前」という問題意識です。乾さんはたくさんさんの蒐集仮面、あるいは見学された民俗芸能群の考察を通して、「能面以前」がいかに豊かな世界かを語られてきました。そのお仕事を受け留めつつ、今回私たちは、「能面以前」という大きな射程の中で、ひとつの絞り込みをしました。それがフォーラム第一部の「土俗面―面と語りのドラマツルギー」というテーマなのです。「土俗」という言葉、表現は、ちょっと古めかしいし、問題なのではという意見もありましたが、民俗仮面ではおとなしくて面白くないということ、あえて土俗面としたわけです。パネラーの方々の報告と討議で、土俗面の魅力と多様性は提示できるのではないかと思います。

フォーラム第二部は、「白い翁と黒い翁―折口信夫・乾武俊の翁論を超えて」としました。冒頭でお話したように、乾さんは『黒い翁』というタイトルで本を刊行された。まさに乾武俊さんのお仕事と人となりを実現する本といえます。むろん土台には折口信夫の黒い翁先行説があつて、乾さんは折口の見解を踏まえつつも、批判もされている。

ひるがえって考えてみると、私たちにとって折口の翁論とはどこまで自明なのか、どういう現在の意義が孕まれているのか、同時に乾さんの黒い翁論もあらためて見つめ直す必要があるのではということの設定したのが、今回の第二部ということになります。

ですから今回のフォーラム第一部と第二部は、乾さんを中心にした紀州仮面フォーラムのなかから私たちに引き出した、まさに「その先」の問題なのです。

この場でパネラーの方々の報告とコメントをベースに議



会を開ききっかけになった乾武俊さんもモニターでご登場。



酷暑の中、多くの方々が会場に足を運んでくださいました。

論を深めることが、なにより乾さんの学恩に対しての返礼になるはず。乾さんはおそらく反論してくることでしょう。後日のそんな楽しみも含めて、今日この場を設けました。もちろんテーマは多岐にわたり、議論は尽くせないでしょう。翁を考えるうえでの「要」というべき翁猿楽の問題も今回はあえて外しました。仮面と語りに凝集する宗教芸能というテーマは実に多重で奥深いです。

私ども、実は仮面フォーラム第三弾を企画、構想しています。期日は二〇一四年一月十一日から十二日、会場はふたたび和歌山で、県立博物館での乾武俊仮面展開催に合わせました。今日の問題提起と報告、討論の内実と課題を携え、また新しい観点を導入してのフォーラム第三弾で、一つの区切りを迎えられるかと思っています。以上で私の「提題にかえて」を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

「やまもと ひろこ」